

## 国内での日本語教育と海外での日本語教育 ⑤

## ルーツはどこに

第二次世界大戦後、再スタートのような形で天理教の海外布教が始まったわけであるが、文化活動としての日本語教育の展開はいったい何がルーツになっているのだろうか。そのためには戦前に遡る必要があるようだ。

戦前の中国伝道の上で、日本語教育を行っていた佐藤軍紀が残した『黄土に祈る』(昭和16年)という本に興味深いことが書かれている。旧仮名遣いなので現代仮名遣いに直して引用することにする。

昭和八年頃である。成不成を神に委ね、真暗な闇の中を神の声を頼りに突進してきた華人救済の道も、その頃には信者七、八十名という予期しない素晴らしい結果を生み出していた。朝と夜には私のところに、きっと2人や3人の中国人が集まって世間話に花を咲かせていた。私は彼らの信仰をいかにして、強い大きなものにしてやろうかとそれのみに心を砕いていた。ここに思い浮かんだのが日語教授である。まず我が天理教は日本の宗教たるゆえ、彼等の曲げられた日本観を是正し、真の日本の姿を知らしめて、日本に親しみを感じしめねばならぬ。而して真の日本を理解し、日本を愛せしめるためには日本語を知らしめることだ。その心の基礎の上に天理教信仰を植え付けてこそ、最も堅固な信仰を把握せしめ得ると信じた。(292頁)

そして、佐藤軍紀は日本語教育を行うことを決め、ひらがなを教え、さらには天理教のおてふりの地歌であり、ひらがなで書かれている「みかぐらうた」の本を読めるまでに指導し、なおかつ歌えるようにしたようである。そして排日運動の中であって、後に日本語学校を開くことになった。彼は朝から伝道に出て、信者の家を回って教を説いて夕方から教壇に立っていた。「日語教授は私の伝道であった」とも、彼は語っている。初めてこの本を読んだ時に、筆者は大変驚いた。天理教がなぜ文化活動として海外で日本語教育を展開しているのか、ここに答えを見つけたような気もした。

## 長期にわたるつながりを築くため

日本語学校を開くという佐藤軍紀の新しい試みは、当時いろいろ批判もあった。「私の日語学校創立は、本教として始めての試みであっただけ、内地、現地を問わず賛否<sup>ともども</sup>交々の批評を下された」(308頁)とある。それでも彼は自分の道が正しいと信じ、進んでいった。これは現在の文化活動を考えていく上でも話し合われていることと同じであるように思う。息の長い活動であるために結果が見えにくい部分があるようにも感じる。

「私は卒業の回を重ねるごとに六か月や一年ぐらいの日本語教授では、到底人材も出来なければ、日本語の完成を期することも不十分だ。どうしても生徒たちと長期に涉<sup>つな</sup>りての連繫<sup>つな</sup>をつけ、吾々が絶えざる指導と鞭撻<sup>むち</sup>を惜しまないところに所期の目的を達することが出来るのだ。それにはどうしても彼等と宗教的師弟関係を結ぶことが自分の立場として最も簡便で近路だ。」(315頁)と述べているところから、佐藤軍紀は、自分の信念に間違いはないと思ったようだ。

この『黄土に祈る』は教内で海外布教に携わる者の間で広く読まれていたのではないだろうか。そして、半世紀以上にもなる海外布教のための文化活動として、日本語教育が続けられてきたことに影響を与えていたのかとも思われる。北京での伝道については、『海外布教伝道部報』第154号(1977)から第204号(1982)の長期にわたって「北京伝道回想」というタイトルで、夫人の佐藤玉栄の回想録が連載されている。

## 日本語ブーム

『黄土に祈る』によれば、当時の北京では日本語教育が盛んになった時があったようだ。満州事変後一時急激に燃え上がった日本語熱の波に乗り、北京には私立の日本語学校が大小合計200余カ所<sup>ぞくしゅうつ</sup>簇出した。中には昼間、日本人経営の日本語学校に生徒として通学、夜間は自ら教鞭を取って堂々と生徒に日本語を教えているというようなインキキ学校さえあったという。日語学校の看板さえ掲げれば、立ちどころに50～60名の生徒は集められるという状況であった。わずか6、7カ月の日本語を習っただけで奇怪な日本語を教える中国人教師、商業的打算でもって“生煮え”の中国語で日本語を教える日本人教師などによる教育の結果は果たしてどのようなものになるか、慄然たるものがあっただけという。(319頁)

関正昭『日本語教育史研究序説』(スリーエーネットワーク、1997年)では北京における日語学校は約50校あったようだが、かなり怪しい中国人経営のものも多かったと思われる。(57頁)戦前の北京で日本語ブームがあったということも驚きだが、4、5年後には排日運動の嵐の中、淘汰されて激減した。そうした中、佐藤軍紀の学校の卒業生は最終的には400～500名に達していた。またその中から彼が頼みとする弟子たちもできていったと思われる。これには一度、師弟関係を結べば生涯、師であり、子が信頼した師匠につけば、その親も厳しく仕込んでほしいと頼むような中国人の気質も影響しているように思われる。

## 骨を埋める覚悟

佐藤軍紀の北京での活動をもとに話を進めてきたが、現在と比較してみても、やはり長期にわたってつながりを持ち、時間をかけて現地<sup>現地</sup>で活動することが大事なのかとも思える。現在でも海外の拠点に人を送り続けているが、期間は様々である。筆者の知る限りでは、骨を埋める覚悟で出発して現地<sup>現地</sup>に長くいる人もいれば、志半ばで戻った人もいる。人事や個人的な事情も絡んでくることであり、善し悪しを問えることではない。期間<sup>期間</sup>はともかく各拠点に人を送り続けていることで、現在まで続いて来ている面はあると思われる。

天理教青年会海外人材派遣が1991年から始まり、現在も第15次派遣予定の研修生が天理教語学院で研修中である。第1次からの派遣生の名簿を見ていると、2年の派遣期間を終えて帰国し、再度、直属教会からの派遣として現地<sup>現地</sup>へ向かい、布教所を構え、現地<sup>現地</sup>で布教をしている者もいる。あるいは、文化協会や出張所に勤めながら布教を続けている者もいる。数的に多いとは言えないが、志のあるものが再度、海を渡っている例がある。息の長い活動を続けて行くことが海外布教の上では大事なのかとも感じる。